服のチカラ

世界を良い方向に変えていく

10 服のチカラを、難民・避難民のもとへ
全商品リサイクル活動

MADE FOR ALL ユニクロ UNIQLO

世界を良い方向に変えていく

服のチカラ

10

表紙の写真：上岡伸輔

CONTENTS

04　全商品リサイクル活動

06　ケニアの難民キャンプで出会った若者のチカラ

10　カクマ難民キャンプの暮らし・教育・職業訓練

12　ラムマンさんが日本に来た理由

14　「300万着足りません」キャンペーン
　　ご報告と御礼

15　FROM FAST RETAILING

服のチカラを、難民・避難民のもとへ

全商品リサイクル活動

ユニクロとジーユーは、服を生産・販売する企業として、服の価値を最大限に生かすために、お客様のもとで不要になった服を店頭で回収し、難民・避難民に届ける「全商品リサイクル活動」を行っています。

さまざまな事情で祖国を追われ、命がけで他国へと逃げて来た人々。しかし貧困、文化・言葉の違いなど、逃げた先の国でも、難民の人々を囲む環境は、決してやさしいものではありません。それでも多くの人は、夢を胸に懸命に生き、未来への一歩を踏み出そうとしています。今号のテーマは「全商品リサイクル活動」です。服のリサイクルを通じて、難民問題について関心をもっていただく。それもひとつの“服のチカラ”だと考えています。

お客様とともに、
服のチカラを難民・避難民のもとへ

全商品リサイクル活動

ユニクロとジーユーでは、お客様のもとで不要になった服を店頭で回収し、
UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）と協働で難民・避難民に届ける活動を行っています。
厳しい寒さを乗り切る1枚を、今、必要としている人がいます。
裸の子どもが1枚着るだけで、防げる病気やけがもあります。引き続きご協力よろしくお願いします。

1 ユニクロ、ジーユーの服を買う

2 大切に長く着る

3 着なくなった服は、店舗に戻す

ユニクロとジーユーの店舗では、1年を通じて、不要になった服を回収しています。おもちいただいた服は、店頭の回収ボックスに入れていただくか、スタッフにお渡しください。

※回収ボックスを設置していない店舗もあります

4 「まだ着られる・もう着られない」を分ける

［着られない］

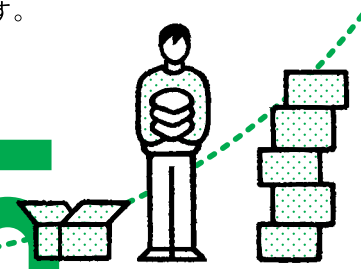
燃料・繊維などにリサイクル（約1割）

もう着られない服は、燃料化したり、工場などで機械の油拭きに使用される雑巾「ウエス」に生まれ変わります。

［着られる］

5 季節、男女、サイズ別などに仕分ける

難民キャンプなどで服を配布しやすいよう、現地に発送する前に、服の種類やサイズなどの基準に沿って12種類に分類、整理します。



6 届け先、届ける服を決める

UNHCRを通じて、届け先の優先順位や現地のニーズを把握。気候はもちろん文化や宗教にも配慮した服を準備します。

7 難民・避難民のもとへ

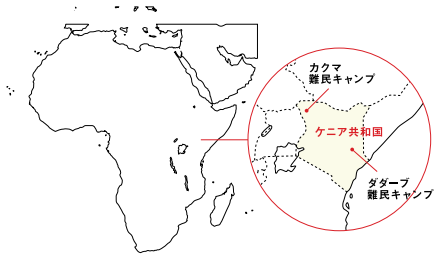
輸送中に紛失したり転売されることがないよう、ユニクロの従業員が現地に赴き直接配布するなど、お客様からお預かりした服が難民・避難民のもとへ届くまでを確認。また現地の繊維産業への影響についても配慮しています。

イラスト：添田あき

ケニアの難民キャンプで出会った

若者のチカラ

過去最大規模といわれるソマリアの人道危機。
干ばつも重なり全人口の3分の1が故郷を離れざるをえなくなり「最悪の人道危機」ともいわれています。
隣接するソマリアからの難民も多い、ケニアの難民キャンプに、
今回、全商品リサイクル活動の一環として100万着の衣料支援を実施しました。



ケニア共和国

ケニアには、カクマ難民キャンプと
ダダーブ難民キャンプがあり、
首都のナイロビでも多くの難民が生活をしている。
ケニアに避難している難民数は63万人を超えており、
その数は現在も増え続けている。

今回訪れたのはアフリカ大陸の北西部に位置するカクマ難民キャンプ。その実情はとても厳しいものでした。ケニアの中でも特に開発が遅れ、気候的にも厳しい地域にあり、水事情も悪い。長引く紛争により、祖国に帰れる目途もたちません。水、食糧、テントなど最低限の支給はあるものの、衣料支援は滞りがちです。ひどい干ばつと砂嵐で体が砂埃だらけになりますが、水事情が悪い中では服を洗う余裕はありません。特に子ども服はもともと不足している上に配布される数が少ない状況。子どもたちは裸か、大人が着古したTシャツを着ることが多く、常に感染症やけがの危険にさらされています。今回、過去最大となる100万着の衣料支援を行いましたが、1人上下2着ずつ配布をしたとしても、25万人にしか配布できません。一方、ケニア国内の難民の数は63万人にものぼります。100万着でもまだまだ、足りないのです。今後もケニアへの衣料支援を継続して実施していく予定です。

初日に訪問した女子寄宿学校でのこと。すでに配布されたユニクロの服を着ている女子学生たちの、弾けるような笑顔に出会いました。国連難民高等弁務官特使であるアンジェリーナ・ジョリー氏の寄付によって建てられたこの学校で学ぶ彼女たちは、難民の中では恵まれている方で、普段は制服を着ています。ユニクロの服を着ている彼女たちにカメラを向けると、嬉しそうにはしゃぎながら、次々にポーズをとってくれました。真っ赤なアウターやベーシックなパーカーをスマートに着こなし、スラリと伸びた長い脚にスリムなジーンズをスタイリッシュに着こなしています。中には、ジーパンのサイズが少し小さめだけど、格好良いから着ているという少女もいます。「どういうときに着ているの？」と聞くと、「おしゃれが好きなので、休日に着るのを楽しみにしているんです」と微笑んでくれました。おしゃれや服にとても興味がある彼女たちですが、持ち物は日用品や雑貨もふくめて小さな衣装箱ひとつ分程度。服は3、4枚に過ぎません。日中も夜寝るときも、制服を着ているという子もいる中で、ユニクロからの服のプレゼントに対する喜びは想像以上に大きいものでした。放課後に休日に、ユニクロの服はすでに彼女たちの生活に溶け込んでいました。

彼女たちに将来の夢を聞いてみました。手渡した画用紙に書かれていたのは、「ジャーナリスト」「医者」「先生」…。簡単ではないけれど、彼女たちには夢がある。厳しいキャンプ生活の中でも、それぞれの夢を胸に、日々、一生懸命勉強をしています。私たちの届けた服が、少しかもしれませんが、自分に自信をもつための後押しをできたかもしれません。服は、暑さ寒さを防ぐ、衛生面の改善に役立つといった根元的な役割や、今回ケニアで出会った女子学生たちのように自己表現の手段にもなります。

これからもずっと、服を必要としている人のチカラになり続けたい。そのために、私たちはこの活動を継続していきます。

あなたの夢は何ですか？

カメラに笑顔を見せ、ポーズをとるカクマ難民キャンプの若者たち。
彼等のこれまでと、これからの夢について聞いてみました。

STORY_01

オーガスティンさん　南スーダン出身　19歳

いつか、母国に貢献するために

今は難民キャンプの初等学校で子どもたちに勉強を教えながら、大好きな物理の勉強をしています。父親と弟を失い、このキャンプで暮らしているのですが、決して勉強する環境が整っているわけではありません。さまざまな家庭の事情で学校に来られなくなる子もたくさんいます。また教える側も、自分も含めて、教師としてのカリキュラムの組み方といった教育を受けているわけではないので、ついてこられない子をどう指導するかがわからず、子どもたちの興味も落ちてきて、それが成績や出席率に影響してしまいます。

家に電気はないので、なかなか自分の勉強もはかどりません。通学にかなり時間がかかるので、学校に泊まって勉強したこともあります。努力のかいあって、昨年、ケニアの統一試験で優秀な成績を修めることができました。さらに幸運にも奨学金を受けるプログラムにも合格し、カナダの大学に進学予定です。自分の将来は自分が努力して、勉強して切り開くしかありません。これからは、カナダで物理を学び、いつか母国に戻って、不足している電力状況などを改善し、祖国に貢献するのが夢ですね。

STORY_02

サディアさん
エチオピア出身　23歳

辛い経験をも、生きる力に

エチオピアから逃げて来て、子どもはこのキャンプで生まれました。幼い子と二人、最初は英語も全然話せなくて苦労しましたが、今ではキャンプで活動してるNGOで働き、わずかですが生活の足しを得ながら、自分の民族のリーダーも務め、キャンプ生活の向上に取り組んでいます。これからは、女性たちのエンパワーメントを推進するために、手づくりのプログラムや映像を用いて啓発活動を進めたい。夢を叶え、自立する女性を一人でも多く応援していきたいです。

STORY_03

キブロンさん
エリトリア出身　12歳

夢は、父親と同じエンジニア

家族を失った僕を養子として迎えてくれた義理の父と家族に、ほんとうに感謝しています。だから、こんなに幸せな日々をくれた家族に恩返しするためにも、父と同じ電気技師、エンジニアになって跡を継ぎたいです。
そして、大好きな算数の勉強と、父が教えてくれている英語を生かして、いつかは家族でエリトリアに帰り、故郷の役に立てたら良いなと思っています。

約10万人が暮らすケニアの難民キャンプ

カクマ難民キャンプの暮らし・教育・職業訓練

UNHCR
ケニア事務所
箱﨑律香さん

ケニアのカクマ難民キャンプでは、さまざまな国から逃れて来た、文化も宗教も異なる人々が一緒に生活をしています。そんなカクマ難民キャンプでの暮らしについて、UNHCR（国連難民高等弁務官）ケニア事務所の箱﨑律香さんに伺いました。

厳しい自然環境の中、15の国出身の人々が共存 多国籍・多民族の難民キャンプ

カクマ難民キャンプの特徴のひとつは、15もの国から逃れて来た人々が、ともに生活をしているという点です。ここまで多くの国・地域出身の人々が同じキャンプで生活するのはとても珍しいケース。人々は、言葉や文化、宗教の違いを認め合いながら共存しています。

カクマ難民キャンプがあるのは、乾季には砂嵐、雨季には洪水に見舞われるなど、ケニアの中でも自然環境が厳しい地域。適切な衛生環境を保つのに欠かせない水も、非常に限られています。

そして開発が遅れていて自然資源も乏しい地域なので、環境や地元住民への配慮は欠かせません。UNHCRでは、病院を地元住民にも開放したり、資源を枯渇させないよう、緑化活動を行うなどしています。

カクマ難民キャンプの出身国別比率

出身国	人口比率
ソマリア共和国	47.6%
南スーダン共和国	31.7%
エチオピア連邦民主共和国	6.0%
コンゴ民主共和国	5.6%
スーダン共和国	4.6%
ブルンジ共和国	3.1%
その他　9カ国合計	1.4%
合計15カ国	約10万人

2012年9月現在（UNHCR調べ）

将来の夢・希望への一歩を築く「教育」

難民の人々にとって、将来に備えて、教育を受けることはとても重要です。教育は、子どもたちや若者が未来に目を向ける手段、自分の将来を自分で切り開く力となります。

キャンプ内には学校があり、初等教育までは誰もが受講できます。ただ実際には、家事や幼い弟や妹の世話などで、学校に通うことができない子どもも多くいます。そのため、保護者に教育の大切さを伝える啓発活動も行われています。

またカクマ難民キャンプには女子寄宿学校があり、少女たちがともに生活をしながら学んでいます。写真aは、昼食の様子。栄養価の高いスープ状のものがコップに1杯支給されます。厳しい境遇の中でも、おしゃれは彼女たちの楽しみのひとつ。衣装箱(写真b)の中には、化粧品や数枚の服が大切にしまわれています。

自立して生きていくための技術を学ぶ「職業訓練所」

キャンプ内には、難民の人々が、祖国に帰ることができたときに自立した生活ができるよう「職業訓練所」が設けられています。

整髪、縫製、大工などいくつかの種類があり、技術を学ぶことができます。しかし職業訓練の希望者数に比べると、難民キャンプで用意されている訓練の場・機会は、不足している状態です。

写真aは、縫製を学んでいる様子。学校のユニフォームを受注生産する場合もあります。

写真bは、ピーナッツバターを生産している様子です。ピーナッツを皮ごと使用。オイルなどの添加物は使用せず、100%ピーナッツのバターをつくっています。できあがったピーナッツバターは、難民キャンプ内のクリニックで乳幼児のための栄養補給に活用されています。

「難民」について知っていますか？

ラムマンさんが日本に来た理由

難民の中には、安心して生きる場を求めて日本に移住する人もいます。
現在、ユニクロで働いているラムマンさんもその一人です。

祖国のミャンマーから、たった一人で日本に来たラムマンさん。ラムマンさんが「難民」になった理由、それは祖国を出る以外に迫害の危険から身を守る術が無かったためでした。軍事政権による民主化運動弾圧が横行していた90年代のミャンマー。「頼まれて預かっていた資料が、民主化に関するものだったために、まだ子どもだった私も、弾圧の対象にされました」。家族や友人と別れを惜しむ余裕もないまま出国。安心して生きる場を求めてたどり着いたのが日本でした。でも、言葉も文化もわからない。頼れる人もほとんどいない。物価も高い日本でどうやって生きていけばよいのか。心の支えになったのは、幼い頃からの母親の教えでした。ラムマンさんは、ミャンマーの中でも独自の文化や言語をもつチン民族の出身。「両親の仕事でチン州から都市部のヤンゴンに引越した際、言葉の違いからいじめられたのですが、母はいつも『自分が目指すことをあきらめるんじゃないよ』と励ましてくれて。その言葉がずっと頭に残っているんです」。

寂しさや不安、周囲に理解されないくやしさも「負けるもんか！」とはね返して、懸命に努力を重ねたラムマンさん。4年かけて日本で難民認定を受けた後、「難民高等教育プログラム※1」の選考に2度目の挑戦で合格。2010年から関西学院大学に通っています。「いつかは民族の役に立ちたい。そのためにももっと勉強したいんです」。

大学に入学し、仲の良い日本人の友達もできた頃、驚いたことがありました。それは、日本では想像以上に、「難民」について知られていないということ。「友達から『難民はみんな、何もしないで支援を受けている人だと思っていた』と言われたときは本当にショックでした」。一言で「難民」といってもさまざまです。経済的な支援が必要な人、自立のための情報が必要な人。また支援を受けるだけではなく、過酷な状況に屈せず前向きに生きる難民の人々の姿に、周囲が励まされること、勇気をもらうこともあります。

現在ラムマンさんは、大学近くのユニクロの店舗でアルバイトをしています。いつも笑顔で頑張る姿は、一緒に働くスタッフからも信頼されていて、お客様からお褒めの言葉をいただくことも。ユニクロの「難民インターンシップ」（P13参照）をきっかけに、働き始めて約1年。ラムマンさんには新しい夢ができました。「いつかミャンマーにもユニクロが出店し、祖国のユニクロで働ける日が来たら、と思っています」。

ラム マンさん。ミャンマー、チン州出身。1996年に日本へ。現在、関西学院大学3年生。「難民インターンシップ」を経て、2011年11月よりユニクロ阪急西宮ガーデンズ店でアルバイトをしている。出国から14年後に両親と再会。現在は両親も日本で暮らしている

Refugee Affairs

難民・国内避難民とは？
戦争や内戦、あるいは宗教、人種、政治的意見の相違による迫害などが原因で、他国に逃れてきた人たちを「難民」、同じ理由で、自国の他の場所へ避難した人々を「国内避難民」という。

難民キャンプ
食糧、水、医療、生活用品などを提供する一時的な避難場所。安全性のほか、周辺地域の自然環境にも配慮して設置される。また難民キャンプではなく、地理的、経済的な理由から、都市部に避難する人もいる。

難民問題の解決策
①本国への帰還：一番良い方法だが、問題の長期化などで不可能なケースもある。
②庇護国での定住：逃げてきた国に定住し、自立を目指す。
③第三国への定住：①、②が難しい場合の解決策。各国と協議の上、本国、庇護国以外の第三国への定住を目指す。

UNHCR
国連難民高等弁務官事務所。難民・避難民を国際的に保護・支援し、難民問題の解決に努める国連機関。2011年2月、ファーストリテイリングとグローバルパートナーシップを締結。

難民問題についての詳細は、UNHCRのホームページをご覧ください。http://www.unhcr.or.jp

※1 日本に居住する難民に対し、UNHCRを含む選考委員会が条件を満たす候補者を推薦し、提携大学が学部教育を提供するプログラム

Global Partnership Program

ファーストリテイリングとUNHCRは、相互にインターンを派遣するプログラムを2011年より展開しています。

・難民インターンシップ
日本に居住する難民の自立支援として、職業体験の場を提供。年間50名を目標に、ユニクロ店舗で2週間～最大3カ月間のインターンシップを実施しています。

・難民キャンプ派遣プログラム
ファーストリテイリングの従業員を、難民キャンプに半年ごとに2名ずつ年間4名派遣。衣料ニーズの把握や全商品リサイクル活動に基づく衣料配布のほか、各種支援業務を行っています。

ご協力ありがとうございました

ユニクロとg.u.ジーユーでは、UNHCRより300万着の服をこの秋冬に世界の難民の方々に届けたいとの要請を受け「300万着足りません」キャンペーンを実施しました。2012年6月より、日本、韓国、アメリカ、シンガポール、香港、イギリス、フランスのユニクロとジーユーの全店舗で、300万着回収を目標に、キャンペーンを開始。新聞広告やfacebookでの告知のほか、店舗には回収ボックスも設置しました。多くの皆様にご協力いただいた結果、10月7日、300万着回収を達成することができました。心より御礼申し上げます。私たちが責任をもって、ルワンダ、ヨルダン、イラクなど、世界各地の難民・避難民の方々へ届けます。

FROM FAST RETAILING

世界中の人々に、本当に良い服を、服のチカラを

2001年、フリースのリサイクル活動から始まった全商品リサイクル活動は、現在、日本国内だけではなく、韓国、フランス、イギリス、アメリカ、シンガポール、香港、台湾、上海市内でも展開しています。今後も、世界中の全ての販売国で展開することを目指し、活動を推進して参ります。

お客様からお預かりした服の多くは、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）と協働で、世界の難民・避難民の方々へ寄贈しています。2011年2月、ファーストリテイリングとUNHCRは、グローバルパートナーシップを締結しました。本誌P12-13で紹介した「難民インターンシップ」もグローバルパートナーシッププログラムによる活動の一環です。こうした活動を通じて、より広い領域での難民・避難民問題に、UNHCRと協働で取り組んでいくことを目指しています。

難民・避難民支援を継続していく一方、服の回収拠点が日本から世界に広がり、服に対するニーズも日々多様化していく中で、私たちの衣料支援も、ニーズに応える形で変化、拡大しています。さまざまな国際機関やNGOなどとパートナーシップを構築し、難民、避難民だけではなく、発展途上国の妊産婦や乳幼児などにも、衣料支援の範囲を広げています。

本当に服を必要としている人に、必要な服を届けるために、また服を生産・販売する企業として、最後まで責任をもつために、私たちができることを追求していきたいと考えています。今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

全商品リサイクル活動に共感いただける、教育機関、企業、NGOなどからのお声をお待ちしています。

全商品リサイクル活動は、私たちだけで完結できるものではありません。世界中の本当に服を必要としている人に、本当に必要な服を届ける。そのためには、服の回収・配布をはじめ、ともに活動し、新しい可能性を見出していけるパートナーが不可欠です。これまでにも、教育機関と連携し服を回収したり、国際協力NGOジョイセフとともにザンビアの診療所を訪れるなどしました。

全商品リサイクル活動に共感いただき、今後の展開について興味をおもちの教育機関、企業、NGOなどの方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡をいただきたく存じます。お問い合わせをお待ちしております。

これまでの活動事例

従業員やスーパーバイザーが地域の小中学校で出張授業を展開

ザンビアで妊産婦・乳幼児に服を配布

ご意見、お問い合わせは下記までお願いいたします。

FR_G_frgcsr@fastretailing.com

FAST RETAILING

「服のチカラ」vol. 10　発行元：株式会社ファーストリテイリング　www.fastretailing.com/jp/csr